

---

# 夜逃げ

TAKA

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夜逃げ

### 【Nコード】

N4337D

### 【作者名】

TAKA

### 【あらすじ】

夜逃げをした女、しかし黒猫が現れて……………

ひとりで夜逃げした。  
めちやくちや怖かった。

東京から北海道に行くときも、誰か見てるんじゃないかなあとビクビクしながら飛行機に乗った。  
電車に揺れて、バスに揺れて、ほとんど人が来ないような場所に行くとき、いかにもオンボロな小屋がある。

ここに身を隠せばいいんだあ  
やっと安心して息を長くはいた。

夜逃げは成功なり  
その場でガッツポーズをした。

小屋の中に入るとものすごかった。  
床の板に亀裂が入っているとこがある。  
空気が湿り気とほこりでどんよりしている。  
うーわっ、信じらんない

東京の家から持ち出した地震用の非難道具から簡易毛布を取り出して、寝る準備をした。  
ここにいれば借金とりも来ないでしょうよ、つーか絶対来るな  
もう朝になっていたけど、安心してぐっすり寝た。

起きると世界が赤かった。  
夕陽がギンギン照らしている。

小屋の扉を誰かが叩いている。

げっ、まさか借金とり

鳥肌が立った。

何にも策が浮かばず、無視して布団にねそべる。

「花がないと何にもできないんですねえ」

静かなおじいさんの声がした。

わたしが驚いて振り返った。

ドアが少し開いている。

燃えるような赤い夕日を背にして、黒猫がいた。

その黒猫は生意気にも2本足で立っている。

「あなたはまるで蝶のようだ」

あんぐりまぬけに口を開けた。

何言ってるんだあ、こいつ

猫は言った。

「けどあなたみたいな蝶が野に放たれたらすぐ死んじゃいますよ。」

……意味深なんですけど

「生き残るにはどんな花の蜜も吸わなきゃならんまい、あわててプルスティクの造花にしがみついてもいいぐらいに、けれどあなたはいつも楽な道ばかり進もうとしますね。そんなじゃあいつまでたっても蜜にありつけませんよ。」

猫は優雅にゆつくりと歩いた。

「その茶色のわたしに貸して下さい。いやあ、見て下さい、わたしの頭にピツタリだ。」

「カバンですよ。」

「すてきな帽子ですね。」

はなし聞いてねーよ

「口笛を吹いて、踊りたくなります。」

猫がルンタツタルンタツタとスキップしながら口笛を吹くと、頭に乘せた茶色のカバンがパカパカ動く。

「何しに来たの？」

「夕飯をごちそうして下さい。やっぱり朝も、ついでに昼も。」

「猫にあげる餌なんてない。」

「そりゃあひどい、あなたはいつもそうやって人を突き放すんですか？」

不毛すぎる、不毛すぎるよこの会話

猫は黒曜石の瞳でじつとわたしを見た。

「何か大切なものを忘れていませんか？」

「いいえ、な・ん・に・も」

猫はそわそわし始めた。そして叫んだ。

「大変だあ！！大変だあ！！」

急に目をぐりぐり回し、走って小屋から出て行った。

何だっただんだあ、あの猫

次の日、猫はまた来た。

非常食の乾パンの朝食に飽きたので、あげようとしたけど猫はやりわり断った。

やっぱり意味わかんねえ

「おなかがいっぱいなのです。」

「昨日は欲しがってたじゃない。」

「悲しいくらいおなかがいっぱいなのです。」

なんか近寄りがたいオーラがでてるなあ

猫はしょんぼりした黒曜石の瞳でわたしを見つめる。

「何か忘れてることはありませんか？」

「えー、何にもないよ」

猫はさらに暗くなった。

「実は昨日、わたしの主人が亡くなったのです。」

わたしの口が堅く閉じられる。

猫はやんわりと語り始めた

「見ての通りわたしは化け猫です。わたしは江戸時代に生まれ、あ  
ることをしたばかりに不老不死になったのです。」

「あることって？」

「神様のお供え物を食べてくらしていたのです。樂がしたくて……

……そしたら気づくと不老不死。切っても裂いても死ねないのです。  
きつと神様がお怒りになったんですよ。」

「ふーん」

「今でこそわたしはきれいだが、数年前までいつも泥まみれだった  
んですよ。長生きしすぎると身なりがどうでもよくなるのです。け  
ど、そんなわたしを拾って洗ってくれる方がいた。」

「へー」

どこかで聞いたことがあるなあ。

「……………」

黒猫がこっちをじっと見る。

そして

「何か忘れていませんか」

「何にもないって」

「本当に？」

目からんらんと光っている。

「本当に！」

しつこいなあ。

「あなたの借金の保証人はだーれだ？」

猫の目がぐるりと時計回りをする。

猫がこっちに迫ってくる。

わたしののどに向かって。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4337d/>

---

夜逃げ

2010年11月2日03時59分発行